

お話し：日本における英語史

2002.4.14

(2015.10.11 捕筆)

西田 巖

(Richmond E.S.)

1. 日本人が最初に聞いた英語 - シェクスピア時代の英語

日本人が、初めて **native** の「英語」を耳にしたのは、今から 415 年前の西暦 1600 年（関が原の合戦があった年）です。この年の 4 月、オランダ船・リーフデ号が九州の豊後に漂着し、この船にウィリアム・アダムスという 36 歳の英人が乗船していました。このリーフデ号は、2 年前の 1458 年、5 隻の船団でオランダのロッテルダム港から西回りで大西洋・マゼラン海峡・太平洋経て東洋航路の新開拓にむけ出帆しました。しかし、航海は散々であつたらしく、マゼラン海峡を越えて太平洋に出たあと、船団は散り散りばらばらとなり、彼の船・リーフデ号だけが太平洋を 5 ヶ月余り漂流した後に今の
大分県の臼杵市近くの海岸に流れ着きました。ということで、彼が日本に現れた最初のイギリス人ということになります。

当時の日本は、戦国時代がほぼ収束する時期にあり、徳川家康が新たな日本の実力者として実権を手中に入れ始めた時でもあります。信長、秀吉、家康が活躍したこの戦国時代にはすでに、ポルトガル人、スペイン人が東回りでヨーロッパから来日しており、我が国でのキリスト教の布教やまた南蛮貿易とも呼ばれる海外との交易も始めていました。信長、秀吉、家康はいずれも西洋の文物に高い関心を示し、実際に海外貿易により実利を得ていました。3 人のなかでもとりわけ海外情勢に大きな関心持っていた家康は、早速、アダムス一行を大阪城に呼び出し対面しています。謁見を許されたアダムスは、家康に、ポルトガル・スペインの宣教師たちがもたらした彼ら達だけに都合の良い一方的な海外情報を覆し、当時のヨーロッパの情勢をありのままに伝えました。（アダムスが残した手紙によりますと、最初、言葉はまったく通じなかったのですが、ジェスチャーやボディランゲージでも結構意が通じたらしく、また、そのうちに日本側からポルトガル語の通訳を出してきたそうです。）好奇心旺盛な家康は、アダムスの情報により当時の海外情勢について一層目を見開くこととなり彼を、今で言う外交顧問として重用し、三浦按針という日本名と今の神奈川県横須賀に領地を与えています。（なお、家康は、天下統一の最後の決戦となる関が原の戦に備え、リーフデ号が持っていた洋式の鉄砲等の武器を徳川方に確保するため、リーフデ号を密かに浦賀に回航していた。）

家康の側近となった、アダムスは、1613年イギリスの通商使節として来日した東洋遠征艦隊司令官・ジョン・セーリスが持参した当時のジェームス一世の日本国王（King）宛の国書を日本で初めてとなる英文和訳をしています。また、イギリスが、

備前・平戸にイギリス商館を開設にも活躍しました。彼は、日本人女性を娶り 1620 年に没するまでに二人の子供をもうけています。(平戸にも、別の女性との間に男の子一人をもうけていたそうです)

アダムスは、1564年イギリスのケント州で生まれています。この年、1564年は、また文豪シェクスピアの生まれた年でもあります。したがって、日本人が始めて聞いたこの時のアダムスの英語は、シェクスピア時代の英語といえるでしょう。

2. オランダ語天下から英学の芽生え

1616年家康の死とともに、アダムスが幕府から受けていた好待遇も変化していったに違いありません。当時、イギリスは東洋進出でオランダに出遅れていました。1613年、アダムスの尽力によってやっと設置された平戸のイギリス商館も10年後の1623年に閉鎖され、ここにイギリスは日本との貿易から完全に撤退しました。一方、徳川幕府は、国内の封建社会の基盤の強化と政権安定をめざすため、キリシタンを禁制し、鎖国政策を強化することとなりました。唯一、オランダだけがヨーロッパとの通商国となり「オランダ語」を通じてのみが西洋との接点に絞られました。ここに我が国と英語との関わりは、185年後の1808年にイギリス軍艦フェートン号が長崎港に乱入するまで英語を耳にすることはありませんでした。

鎖国政策を進めた幕府といえども、やはり客観的にみて進んだ医学をはじめとして兵器、造船、航海学、博物学の西欧の知識や技術を完全に無視することはできず、長崎・出島のオランダ商館を通じてのみではありますが西欧とのチャンネルを細々と維持しました。また、幕府は、オランダとの折衝で通訳に当たらせるため世襲制の通詞を指名し(約20家あった)かれらにオランダ語の勉強を徹底的にさせました。(語学学習の基礎的・体系的訓練を受けた彼らオランダ通詞が、後に、英語、ロシア語、フランス語の西欧語の我が国導入の先人の役目を担うこととなりました。)

このように、西欧との窓口はオランダに限られましたが、オランダ語を通じて、医学の分野では杉田玄白・前野良沢らによる「解体新書」(1774年)、平賀源内による「エレキテル」の実験、青木昆陽による「農学」、そのた「暦学」、「地学」の西欧知識の吸収がなされ、就中、きわめて正確な日本地図を完成させた伊能忠敬も蘭学で得た知識を基礎にしています。また、日本の各藩はこぞってエリート藩士を長崎に出向させオランダ語の学習を通じて最新の西洋知識の吸収に努めました。また、江戸、京都はじめ日本の各地に蘭学塾ができました。このような当時の状況から、日本にとっては、「西欧」＝「オランダ」となり、学習する言葉も「オランダ語」だけであり、「英語」はまったく意識されませんでした。

しかしこの頃、世界を見渡すと、オランダの国力は衰退しはじめており、それにかわり産業革命を経て国力をつけてきたイギリスが7つの海の制覇し覇者として幅をきかしてきました。アジアにおいては、中国やジャワでのオランダから権益を奪取しはじめ

ました。しかし、唯一、日本における長崎だけが、オランダのアジア・ポストとして残っている状態でした。

このような海外情勢下で、アダムスの初来日以来約 200 年経った 1808 年にイギリスの軍艦 **Phaeton** 号が長崎に入港してきました。当初、**Phaeton** 号はオランダ船と偽って入港してきたため、久しぶりの母国からの船と思い出迎え乗船してきたオランダ商館員を船上で人質に取り、また、折衝にあった日本人通訳を海に落とすなどの大変な狼藉事件を起しました。（後日、オランダ以外の外国船の入港を許したことの責任をとって、長崎奉行は切腹しています。）これに驚いた幕府は、急遽、オランダ通詞・本木正栄に「英学」の学習を命じました。これが日本における英学の始まりのスタートとなりました。

本木正栄は、このとき 42 歳でしたが、オランダ館員から借りた、蘭語－英語の会話資料などを参考にして、5 年後の 1814 年には日本最初の英和辞典「諳厄利亜語林」（単語数約 5900）を完成させました。

[補注 1]

ペリー来航の 5 年前の 1848 年 7 月に、24 歳のアメリカ人青年ラナルド・マグドナルドが利尻島に密航者として上陸してきました。彼は、ネイティブアメリカンの血を引いており、祖先のルーツが日本と思ひ込み捕鯨船に乗り込んで来日しました。鎖国下であり、捕えられて長崎送りになりましたが、翌年、強制送還されるまでの 6 か月間、獄中で当時のオランダ通詞に生の英語を教えました。彼の教えた生徒の中に、後に、ペリー来航時に日本側交渉団の主席通詞となった、堀達之助、森山栄之助がいました。

3. やはりアメリカの「外圧」でした - 日本の英語の始まり

このころまた、日本近海、特に、北太平洋海域は捕鯨の好漁場であるため米英の捕鯨船の日本近海での活動が活発となり、このため日本の港での水、食料、薪炭の補給のために日本の開国要求がじわじわと高まってきました。（日本近海での米国捕鯨船の数が増えるにつれ、日本人が難破船として漂流中に米英の捕鯨船に発見・救助されることが増えました。生き残った漂流民達は、ほとんどが日本に送還されています。彼らこそが、庶民階層の日常英語と接した第二の日本人グループであります。彼らの何人かは、自分たちの耳に聞こえた英語をそのまま文字に記録し残しています。このような帰国漂流民中でもっとも有名なのは、ジョン（中浜）万次郎であります。彼は、1841 年 15 歳のときに土佐の港から漁に出て台風に遭遇・難破し鳥島に漂着して数ヶ月の後アメリカの捕鯨船に救出されました。彼の若さと利発さを見込んだ船長のはからいで、彼はアメリカ本国でかなりの教育を受けた後、カリフォルニアの金山で帰国費用を稼ぎ、ハワイに残した仲間をピックアップして、10 年後に琉球経由で日本に帰国しています。）

このような鎖国日本を取り巻く国際情勢の中で、ついに、明治維新(1868 年)に先立つ

こと 15 年の 1853 年 6 月、米ペリーが率いる黒船が徳川幕府お膝元の江戸湾に来航し日本に開国要求を突きつけてきました。この強力、強引な米国の圧力がとどめとなって翌 1854 年 3 月、日本はついに日米和親条約を結び鎖国政策を捨て開国することとなりました。そして、その 4 年後 1858 年には、日米修好通商条約が締結され、下田、函館、横浜、新潟、神戸などが順次開港し日米間の通商が始まるとともに、これらの港に領事館等が開かれアメリカ人が住むこととなりました。（このような開国の動きが広まる中、アメリカから帰国しその動きをつぶさに見ていたジョン万次郎が最初の英語会話書「英米対話捷徑」を 1859 年（安政 6 年）に著しています。）

[補注 2]

ペリーの 2 度目の 1854 年の来日時、幕府は、4 年前の 1840 年に米国から帰国していた歳のジョン万次郎（当時 27 歳）を、対米交渉の通訳として使うため幕府直参として江戸に呼び寄せていました。しかし、『アメリカの恩義を受けてきた者を日本側の通訳として使うのはいかなものか』という水戸斉昭公の意見が通り、当時の英語使い手の第一人者であった彼は対米交渉の埒外に置かれました。（高度な外交交渉の場の通訳として、土佐出身のジョン万次郎の話し方、読み書きの日本語能力も評価もされたかもしれない。）

ペリー一行との外交交渉は、アメリカ側は、英語を正本に、漢文とオランダ語の副本を添え、日本側は、日本文に漢文、オランダ語を添えたものを用いました。

日本の開国は、今でいう「外圧」によるものであり、行き来もアメリカから日本への片方通行のみでありました。しかし、（ペリー来航後の 7 年後の）1860 年（万延元年）勝海舟らが日本人としてはじめて咸臨丸で太平洋を横断しアメリカを訪問しました。このミッションにジョン万次郎も通訳とし同行しており、また、福沢諭吉も団員の一人として参加しています。諭吉はアメリカでウェブスターの辞書を買って持ち帰っています。

そしていよいよ、1868 年徳川幕府が倒れたあと明治維新を迎え、明治政府は積極的に文明開化政策を推し進めることとなります。

当時の政府は、とにもかくにも早期に西洋文明を吸収し欧米列強と伍するため教育の充実に力をいれ、大学などの高等教育機関には英米からのお雇い外国人を教授陣に採用しました。これらの学校では、講義は全部英語で行われました。現在のように、立派な種々の英語辞書・参考書が皆無であった時代に英語による講義を完全に理解することはかなり困難であったに違いありません。新時代を切り開こうとする当時の若者の勉強への意欲には頭がさがります。このような全てが英語による教育を「正則英語」と呼んでいます。このような正則英語教育を受けた人の中から新渡戸稲造、岡倉天心、新島襄らの「明治英語名人」とよばれる人達があらわれています。（当時の英語フィーバーは上層階級

のエリートだけでなく、庶民にもひろがり、新橋・柳橋の芸者さんたちも英語を取り入れた都都逸をよんだという逸話も残っています。)

明治の中期以降になりますと、官立の高等教育機関は地方にも普及・拡大していき、これにともなう学校の増加と当時の明治政府の財政逼迫からお雇い外国人を採用は急激に減り、英語教育は日本人教師が担うこととなり、ここに、翻訳中心・発音無視の英語教育(「変則英語」)に大きく変わっていきました。この変則英語による教育が明治後半、大正、昭和と長く続き、今日のわれわれ日本人の英語学習に大きな影響を与えています。

4. 英語「国賊」から英語花盛りへ

明治維新以降、先進国、特に米英から学び富国強兵を押しすすめてきた日本がついにアジアでは唯一、米英など世界の列強の対峙するところまで近代化を成し遂げてきました。この過程で、苦勞して学び身につけてきた「英語」が大きな役割を果たしたことに疑う余地はありません。しかし我が国の「英語」にとって大きな転機が訪れたのは、昭和10年前後(1935年)からではないでしょうか。2年前の昭和8年には、日本は国際連盟から脱退し、国内的には、思想統制が図られ軍国主義に向かっていきました。このような中で「英語」は鬼畜米英の敵国語として国民から遠ざけられることとなり「英語暗黒時代」に入りました。1941年日米は戦争に突入することになりましたが、英語排斥の極めつけは、時の文部省が1943年3月に英語排除の通達を出し、日常生活の中での外来語だけでなく野球やスポーツの分野の外来語も強制的に日本語に置き換えました。(いつも思うのですが、このような時代、当時の知識層や大学の英文科教授などの英語関係者はどのような思いをしていたのでしょうか。)

しかし、ついに、1945年、多大な人命の犠牲を経て日本は、米英を中心とする連合国に敗北しました。戦後直ちに米軍を進駐軍として迎えるのと同時にラジオで「Come Come Everybody」の英語会話放送が始まりました。これを契機に、まとも、日本国中が一転して英語花盛りとなり、この状況は今も続き、会社でのサラリーマンは出世には英語(の何が?)が必須要件となり、すでに小学校でも3年生から英語を教える時代となりました。

交通や情報通信の発達した今日、日本は国際社会の一員として、世界各国の政治、経済、宗教、民族意識などの大きな潮流とは無縁であるわけにはいきません。そして、国際社会の一員として他国や、異文化の人々との交流を広めていくには事実上の国際コミュニケーションの共通語である英語とのかかわりを断つことはできません。

一方、我々の英語の学習は、1808年イギリスの軍艦 Phaeton 号の長崎来港以来のたっ

た 200 年の歴史しかないのが事実です。そして、幸いであったことに、わが国は他の多くのアジア諸国がそうであったように、植民地支配を受け「英語」を強制的に押し付けられるということはありませんでした。私たちが日頃使っている日本語は、本来の大和言葉の上に、千数百年(英語とのかかわりとの期間と比べ比べ物にならない)かけて、文化の基層や言語構造の違いを乗り越え中国の「漢語」を消化し駆使できる知恵・能力を築き上げてきました。そして、この「日本語」によって日本人としてのアイデンティティを確立しています。このように思えば、我々と「英語」は、丁度、我々の父祖が「漢学」を消化し、また、鎖国時代のオランダ通詞が基礎的、体系的にオランダ語を学習したのと同じように、ここ当面は、「知的プロセス」の積み上げとして「英語」と格闘、よく言えば、正座して学習していかなければならないのではないかと考えています。

以上、日本における「英語」の歴史を概観しましたが、今回は、特に詳しくはふれませんでした。私がここ 10 数年取り組んでいる、英和辞書の発展史（日本の学習英和辞書は世界に冠たるレベルにあります）を見るとまた大変に面白いものがあります。機会を見つけ、このホームページに掲載したいと思います。

=以上=